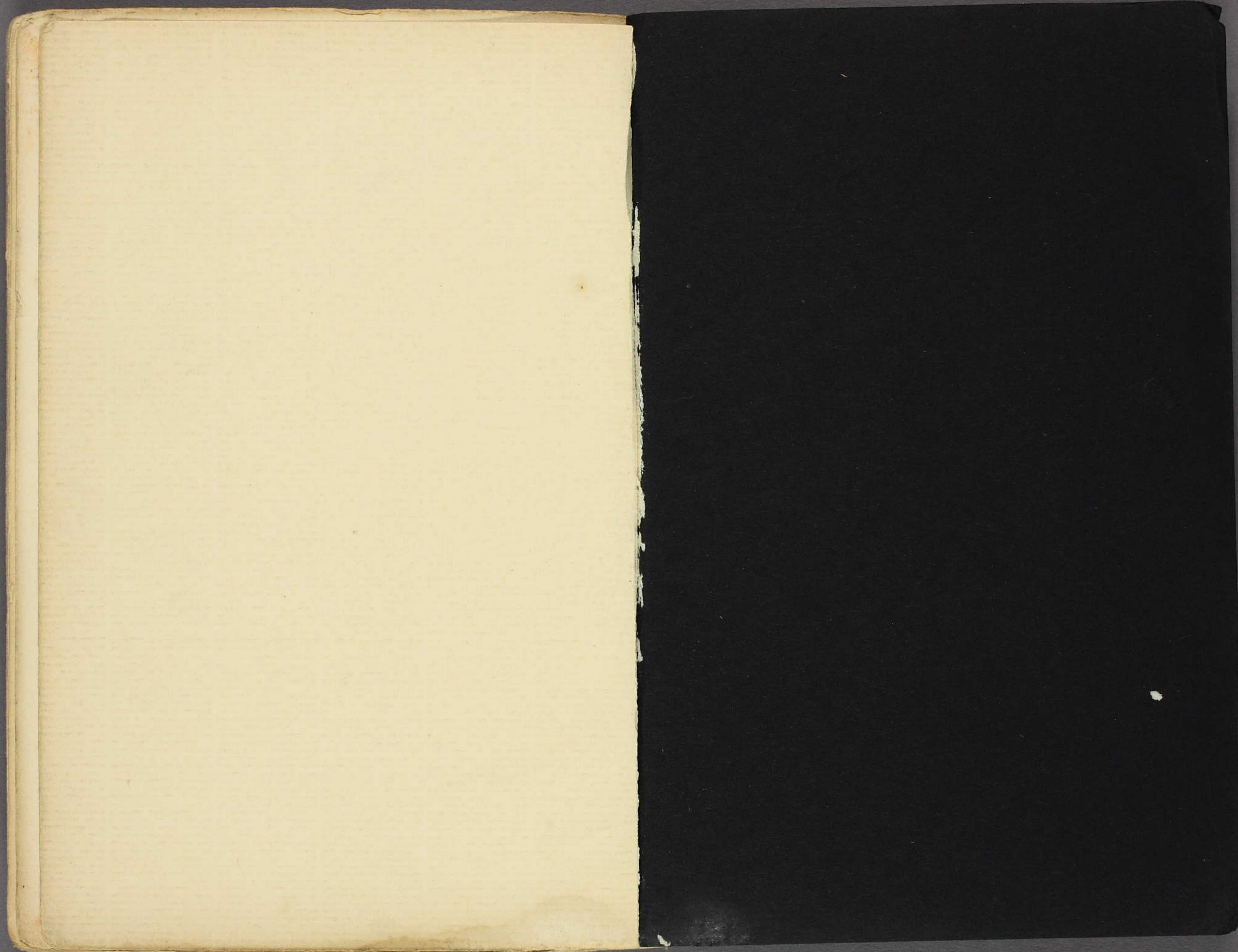


永遠  
と  
無窮

清  
水  
夏  
晨





詩歌集

永遠と無窮

清水夏辰



象印の晨夏



雀 孔

目次

自序

長詩「永遠と無窮」

天体と物語る	（一）
歟に倚る人	（四）
自然の精に魅せらるゝ時	（六）
目醒め	（八）
神聖な外形	（九）
力つきなば	（一一）
夢の一時	（一二）
古本屋を歩く	（一四）
結婚の式	（一六）
私は不浄を去つたそして苦惱を得た	（一八）
永遠の高きに	（二一）
若きを歎く歌	（二三）
僕だ——太陽だ	（二四）
私心	（二六）
和歌「大空」	
大空の言葉	（三一）
満天の星	（三七）
流るゝ雲	（四四）
落日は赤し	（五〇）
緑の色	（六二）
卷末の言葉	

清松  
水原  
夏兆  
晨雄



挿畫目次

表紙デザイン

カット

題字

カット

夏晨の印象

カット

孔雀

エッチング

一箭離絃

カット

宿業の美と愛と歡樂

カット

鍬に倚る人

レノリアムカット

大空

カット

以上松原兆雄君畫

序

清水夏晨君足下

いつちや君は君の魂におくる記念の詩集を出  
版するので、そのイラストレートを私にせよ  
と云はれた。君と同じく非土の悲哀に泣く私、君  
と同じやうに藝術の殿堂に険しい道を獨りぼつ  
ちで、とぼく、と喘ぐ私は、よろこんで私の微力

を致さうと誓ひました。そしてその約束の履行がこのイラストレートと表装です。

もごより甚だつまらんものである事は自覺してゐますし、又あゝもしたかつた、こうもしたかつたといつた風な恨もありますけど、一日の労働でこはゝつた手をふるはしながら、晝餐後の三十分、夕食後の一時間を繪筆を握つて精進した事に非常の愉快を覺えます。

表紙には永遠と無窮に飛躍する眞如を描きま

した。

長詩永遠と無窮の題字の下の二つのフィガーは嚴肅な宿業の中に安住する美と愛と歡喜の相を描いたつもりです。

私の老母は今郷里に病んでゐます。私は果しない大空の下、赫たる太陽に彼女の全快を原始人のやうにひたすらに祈りました。私はそれをそのまま、大空の題字のデザインに用ひました。耕人のレノリアムカッツは、私のそれに於け

る處女作です。春の朝の労働者の歡喜を鋏でか  
たくなつた手で、ポケットナイフで削りました。  
エツチングは、第九回カリホルニア、エツチヤ  
アス、ソサイターの展覽會に出品したものであ  
ります。

永遠ご無窮、何ごいふサウンドのいゝ言葉で  
せう。久遠の過去から永劫の未來ご、窮ない大宇  
宙を縫ふ輪廻の絆は、纏れて雨ごなり、戀ごなる  
解けて風ごなり涙ごなる。その嚴肅な宿業の中

に私共は勇敢に偉大に住まねばならぬ。私の繪  
はそこに生れます。

萬有の生命の母なる大地よ。私の小さな藝術  
をおん身の中に根ざしめ給へ。

萬有を恵む大空よ。私の小さな繪を育み給へ。  
果しない大空のもごに私は泣き又歌ひ得る今  
の境界をうれしいと思ひます。それは私の繪へ  
の供養の一つですから。

私は君の詩の一字一句をイラストレートしま



耕 雲 種 月  
 二 十 余 年  
 脫 落 脫 落  
 一 箭 離 絃

せんでした事を詫びねばなりません。けれども  
 私はこの歌でも詩でも、それを繪畫に翻譯する  
 事の不可な事を信じますから、君の詩から得た  
 私の感興と興奮とをエキスプレスするにのみ努  
 めました。

ペスカデロにて

松原兆雄

自序

此の小さな詩歌集は私の加州に於ける五年の生活を紀念する爲に、私自身が、私の魂に送る一つの紀念品の様なものだ。形があつて形の無いもの、無意義で而も有意義な、尊い一の消滅的流動の藝術だ。

亦此の小さな詩歌集は私の生れた二十五年間の見すばらしい生活をも紀念したい爲に作つた

様なものだ。滿二十五といふ年に達するご種々の事を考へる。其一つの紀念だとも思はれる。いづれ何う考へてもいゝものゝ様にも思はれる。

此の小さな詩歌集に集められた十數篇の詩と百餘首の歌は、比較的最近に近い此半々年位になつた作のみである。極めてつまらぬものゝみだけれど、今の所之れ以上何うする事も出来ない。對照があつて其爲に歌はれたり作られた作物でないから一方判斷出来ない様なものかも知れぬ。

それを私は心配しない。

此の小さな詩歌集に集められた詩歌は、所謂移民地文藝としての詩歌であるかも知れない、亦たそうでないかも知れない。其の判斷は讀む人にまかせる。然し今日歐米及日本詩壇に盛んな所謂民主主義の藝術だとか、工場や、商店から歌はれた詩歌と其趣を異にして居る様に思はれる。それ等の現實乃至生活の詩歌よりも稍々高踏的神秘的なものであると私には思はれる。然

しこれも私の云ふべき所でない。

此の小さな詩歌集に對して云ふべき多くを持たない。然し加州で歌はれ、加州で出版された日本語の詩歌集としては先づこれが最初のものであらうと思つて居る。私は此の小詩歌集を出す事に依つて私の一時代の實在を實感し得るのを覺へ何となく心嬉しく感ずる事を告白する。それは私の寂しい生活を之等の詩歌が尠からず美化してくれたからである。

パクレーにて

千九百二十年復活祭の夜



長詩  
永遠  
と  
無窮



樂歡と愛と美の業宿

## 天体と物語る

俺は今立つて居る

右足は富士の高嶺に

左足はシエーラの絶頂に

そして俺は天体と物語る

俺の身体は空高く秀出<sup>ひい</sup>で

永遠を宿した胸は

鍛へ上げられた頑丈な

骨と筋肉で掩はれ

不滅の感覚の皮膚の上に

生ひ成つた思想の鬚髪ひげかみは

久遠の成熟に雪の如く純白となり

顔は醜みにくいけれど

眼は星の如く輝き

一切の力は眞心から湧く

若しそれ疲を覺ゆる時は

俗事に鍛へ上げられた

鐵筋の腕を

左右の天に擴げ

空の青さを胸深く吸ひ込み

大空高く嘯うそぶげば

2

俺の心は活發となる。

3

されば

世の俗事よ、俺の下もとに起る

雲霧雨風よ!

俺には絶えてかゝわりもない。

青空高く輝く太陽よ

月よ、星よ、

永遠の光を宿す大空よ、

あゝ此處こゝに俺は

天体と無窮を物語る。

鋤に倚る人

早春の朝

遠かすむ畑

其黒土におや指の如く

突き出た無数の緑芽

小さき寶玉を頂き

陽に輝く。

あはれ朝野出の

吾胸に甘き静風よ！



渾身に脈うつ希望よ！

あゝ無数の緑芽！！

耕す者の真心に

よき收穫は

現、見わた

知らず鋤に寄り立ちつ

ながめ飽かざりし。

自然の精に魅せらるゝ時

いとも静かなる

いとも静かなる

春の日の海の邊ほそりに

我仰ぎ伏し

わが見しは――

わがまのあたり見しは

青海原の遠空より

あらはれて海面を

いとも強うふみしめ

7  
我に來し巨人。

今來し巨人

たちまち貌すがた見えざるに

驚きつ我見廻せば

小草に花に亦眞砂に

もろくの魂たまなる顔貌すがたあらはれ

あはれ

立ち上る我こそは

巨人にてありし!

いとも静かなる

いとく静かなる  
春の日の海のほとり。

### 目 醒 め

私は早く目醒め  
夜の明るを待つて居た。  
闇の沈静は  
窓さす星の光に  
落ちついた此世を  
壯嚴の宮と化し  
主なる神のみ心が

一切衆生の心に

目醒めの意識を與へぬ前に

私はひとり

光明と活動の晨の爲に

希望と不安の胸轟ろかし

人生の床の中で

夜の明るを待つて居た。

### 神聖な外形

俺の友人は



俺に寫眞を撮つてくれた。  
 其寫眞は非常によく出来て居た。  
 見て居ると丸で  
 俺の様ではなくて  
 偉大な神様が  
 頭こゝべをたれて一寸  
 考へ込んで居る様に思はれる。  
 こんな神聖な外形を持つた俺が  
 偉大な思想をも  
 持たぬ事が何うしてあらうかと  
 幾度も自分をたがむだ。

### 力つきなば

私は海の上を歩い行く  
 怒濤果て知らぬ大海原  
 空に亂れた狂亂の雲と風  
 其中をわきめもふらず  
 全身の魂うちかため  
 一心に歩いて行く。  
 あゝもろくの魂怒濤と化して  
 なやみ苦しめる其中を

一人渾身の力こめて  
突進する現うつないのちの生命  
力つきなば——あゝ神よ！  
ましましてかの岸に渡し給へ。

### 夢の一時

我心地よく草に臥し  
天を仰ぎてあれば  
春陽あたくかに  
吾眼をめしひ  
極まりなき空の青より

12

恐ろしき祖先の顔あらはれ  
我を見つむるあたり  
吾戀人は  
鈴をふり鈴をふり  
我に近附く！  
あはれ、  
叫ばんとすれば口は啞おどの如く  
手をのべんとすれば  
身体は黒蛇にしかこまかれて動けず  
煩ゆれど騒げど動けざるに  
鈴がなる、鈴が鳴る！

13

戀人の手に鈴が鳴る！

### 古本屋を歩く

俺は古本屋を歩く

そして古雑誌や古書籍を購ふ

其度にエキサイトする。

何故に？

俺は知らない。

然し寂しい移民地で――

此の外國で――多くの同胞が

酒や女に其本能の懊惱をいやす様に

古本屋を歩く時の俺のエキサイトは

俺をよろこばせ亦悲しませるのだ。

あゝそれ故に

俺の願は寂しい。

今日も晝飯をそおくにして

古本屋を歩いて来た。

## 結婚の式

耐へ忍ぶ戀は苦しかった。

悪むべき人生の渦中に

高い思索から見出した彼女との戀は

神聖な祈禱であつた。

あゝ如何に長く耐へ忍んだ事か？

あゝ彼女との甘い結婚の日の喜びよ！！

私は喜びに彼女を部屋に導いた。

赤い電光が血の様に流れて居た。

16

着飾つた私の貌は

超越の歡喜に満ち

永遠の興奮が待ち憧れた

彼女に對して私を狂喜させて居た。

も早總の用意が整つて居た。

私は結婚の花輪を彼女に渡し

香水を振り播き彼女の手をとつて踏つた。

そして一寸とどまり机の上の

モルヒネをぐつと飲んで

再度踏つた。然し

間もなく疲れ果て、打ち仆れた。

斯くて私は

17

ふたゝび離別の憂なき  
憧憬の女性——無言——と  
結婚の式を上げた。

私は不浄を去つた  
そして苦惱を得た

私の夢に

美しい女が居た。

女は私を神秘の谷へ連れて行つた。  
そして二人はそゝに横たはつた。  
間もなく女は小さな袋をとり出して

私の精液をしぼり始めた。

袋はいくらでも大きく澎はぶれて行き

私は死んだ様になつて居たが

女の聲に驚ろいて見上げた。

女は云つた。

「此袋を御覽

みんなに澤山の不浄が

あなたの身体にあつたのです。

さあ立つて行きましょう！

あなたの身体は清められました。

あなたには総あゆる願が

爲しとげられる。そして

其願は皆正しいものゝみです。」

私は只女を見入つて居た。

と忽ち其袋が暴發して

恐ろしい蛇や蜥蜴こかげや蛙などが

洪水の様に私等の方へ

推し寄せて來たので

女は眞青になつて逃げ出した。

私も續いて逃げようとしたが遅かつた。

最早身体は大蛇に強くまかれ

苦痛に耐へぬ滅亡の中に喘いだ。

……………あゝ

その様に苦しい人生の中へ

私の夢は醒め果てた。

### 永遠の高きに

慰さめられつゝ悩む苦しみ

希望と不安に悩む苦しみ

あゝ此の若き身に

これらの苦しみの耐へ難きかなや

闇黒のとりでに獨り悩む苦しみ

饑寒と苦行とに悩む苦しみ

あゝ此若き身に

みれらの苦しみの耐へ難きかなや。

あゝされば

涙あらば涙の限りを流せ

聲あらば聲の限りを上げよ

なやみ苦しめるあはれ若人！

幾歳いくさせはたち

なやみ苦しみに鍛へ上げられし身は

老ひて力つくる時

純白なる鬚髪に包まれて

永遠の高きに登るべし。

### 若きを歎く歌

私の心は煙突の煙

静かな春の日に

大空めがけて、

炎々と立ち登るけれど、

何處まで高く登るやら

また何時何處へ行くのやら

再度ふたたび歸らず立ち登る煙

あゝ煙突の煙。

僕だ——太陽だ

無限の大空の真中で

星雲の群を横切る時

私は次の様な聲を聞いた。

「あの様に

自己に白熱した遊星は

一体何んでしよう！」と

私は答へた。

「僕だ。太陽だ。

僕の白光は、世界及

人類の父なるみたまだ。」と

そして私の後ろに

「あゝ、あの様

に自由に規則正しく

此大空を渡る太陽の上に

祝福あれ！」

といふ叫を聞き乍ら

私は最上の早い遅さで

彼等の群を通り過ぎた。



私の心

私のこゝろは

空行く雲、

ちぎれ／＼て飛ぶ時は

白雲、赤雲——色彩雲いろざりくも

悲しとも見えず。

されどひと日

風寒く

雲かさなりて

かさなり合ひて厚く

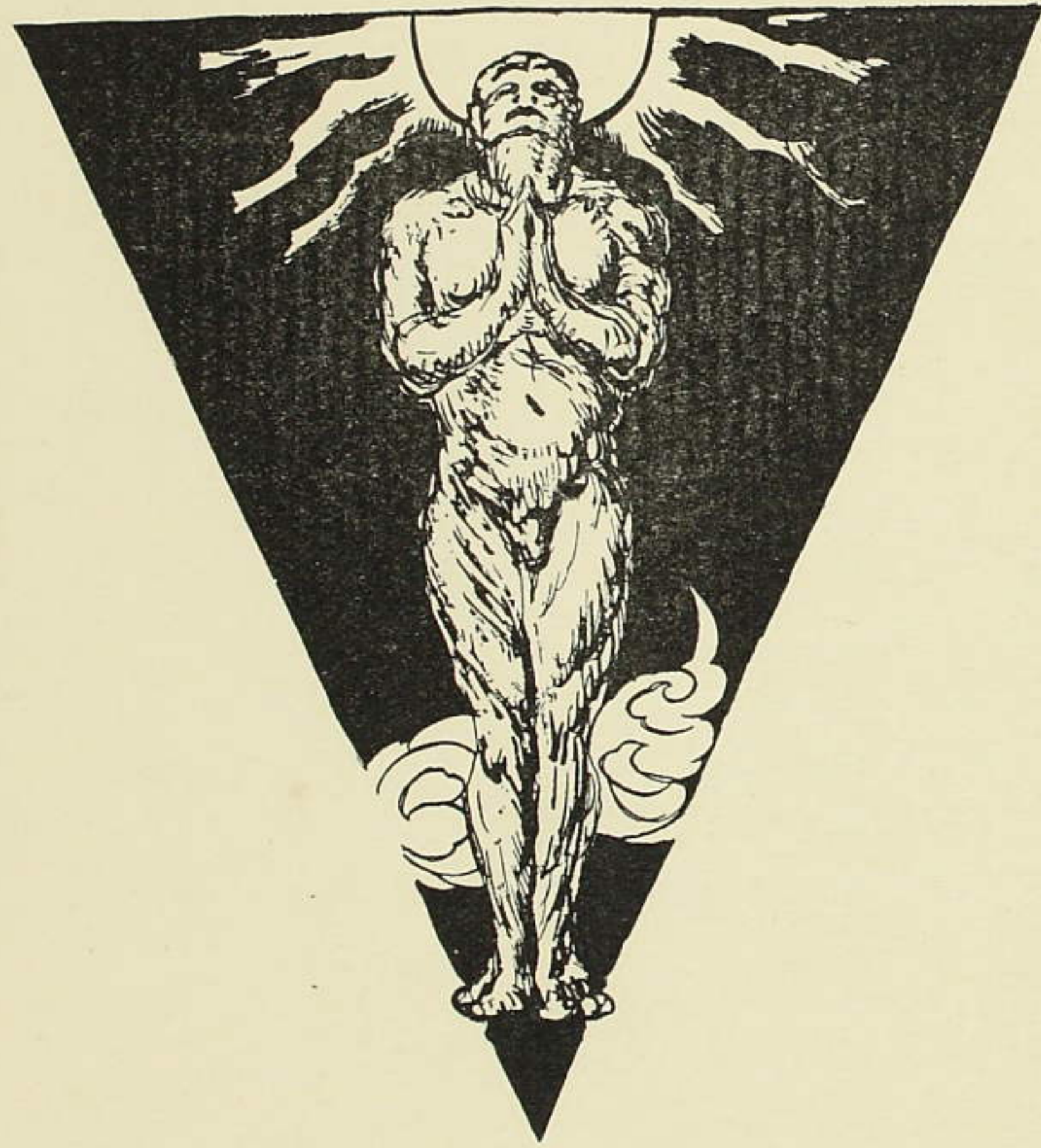
26

動きあへねば鬱々と

雨となりて涙を流す。

27

歌和  
大  
空



## 「大空」の言葉

「大空」の中に集められた百餘首の短歌中には昨年の秋、米國各地講演のため渡米されたヨネ、ノグチ氏に捧げる爲に、桑港發刊の邦字新聞「日米」に發表されたものと、未だ發表した事のないものが取り混ぜられた。

之等の短歌は比較的現實生活に立脚された私の日常生活の一片の様に思はれるので、私にとつては誠に可憐いものである。歌の可否は、私にはわからない事であるけれど、多少でも、四千哩の海外に寂しい青春を送る一青年の心理状態の發露が、讀む人に見て貰へたら、充分であると思つて居る。

加州の天地は、輝かしい青空で纏はれて居る。夏から秋にかけて、野も山も一様に赤い褐色の枯草と化し、それを蘇よみかへら生せる一滴の雨も降らない頃となると、見はたす野も山も花と緑の春の情緒から哀愁と殺伐に捕はれて見るものこそは雲一つない輝かしい青空のみさなる。幾人の旅人が、亦多忙な労働者の群が、此青空を如何に悲しく亦寂しく眺めては此異國情緒を可憐しみ悲しむた事だらう！無趣味は雜白な極めて少

數の友の間にあつて、慰さめもなく戀もなく、まして喜びの一つもない此生活は只に私を寂しくし悲しくし、亦種々の甘い假想の情緒をも恣にせしめた。そして私の此の「大空」の歌はこうした種々の心情から湧き出して、幾度も幾度も繰り返し口ずさまれて、いろいろに記録された。

私はすつと麥嶺<sup>バクレー</sup>に住んで居る。パークレーの名は有名な哲學者の名であり、亦日本語に當てはめるさ麥の嶺となるので此言葉も私を引きつける。氣候がよくて便利で而も靜かな高雅な町なのが好きだ。桑港から金門灣を渡つて、十哩近く隔てて居る。加州大學があり後ろにフット、ヒルがあり、前に金門灣から太平洋が廣く眺められる。私は毎日桑港に通ふて居る。私の家の近くから電車があつてオークランド（同胞間では王府と俗に云つて居り、「樅の土地」とでも云ふ町だ）のフェリー、ヒアリーに通じ、（ヒアリーは何哩か長く海上につき出て居るので有名だ）數哩を渡船で渡ると、桑港のヒアリーの高塔フェリーの下に着くのである。其間は丁度ヴェニス<sup>ヴェニス</sup>の町を歩く様な感が桑港の高樓石家を眺める私を捕へて、時々未だ見ぬ水の町に私を憧憬がれしめる。此行き來は毎度一時間づゝかかる。私のこれ等の歌の大部分は電車やボートの中で、手帳や紙片等<sup>カ</sup>に書きつけられたものである。

桑港の西北に螺旋の登山鐵道で有名なタマルパイ山がある。此山の高さは三千呎とて海を隔て、遠くから、朝日や夕日の中に美しく見へる貌は、詩人ミラーが歌つた様に、ソファアの上に寢た伏し姫の様であり、海<sup>海</sup>の山といふインディアン<sup>インディアン</sup>の言葉の意味にも適つた景色なのが私を常に引きつける。そんな關係から此山の歌も幾つか記録されて居る。亦歌の中にはフリスコといふ變な名前も出て来る。フリスコは桑港の假名で、昔スパニッシュの附けた名稱で、加州が開ける歴史の中で尊い名前だ。今以て俗に呼ばれて居るけれど、一昨年の夏、廣告クラブではサン、フランシスコといふ一つの名前だけを使用せしめる爲にフリスコの名の廢止を決議し、間もなく法令となつて此名の禁止が發表された。そんな事も一漁村と云つたより一寺院から今日の大海港となつた桑港……金塊を中心とする種々の物語りの桑港……を偲ぶ私の心を可憐しめる。其他に公園といふ名の出て来るのは有名な桑港金門公園の事だ。金門灣の入口に位してあり、音樂堂、博物館、植物園、動物園等があるかと思ふと、山あり湖水あり牧場あり、數知れの銅像の中にはロダンのシンカー（考へる人）も加つて居るし、有名なダッチ、ミルも海近くにある。海は太平洋で、廣く遠く見渡せる其展望は、日猶ほ淺い渡米者には郷愁か懷郷の念を浮ばせないでは置かない所だ。ダッチ、ミルで思ひ

出したが、加州の青空の下には各地到る所に水上げの風車が見られる。ダッチ、ミルとは變つてもつと小さな簡單なものだ。桑港の金門公園のダッチ、ミルは有名な畫家レムブランの畫いたミルと同形なもので、それが可憐しい。歌では只單に風車と云つてある。私は一般の此風車が非常に好きだ。天氣のよい日などに青空高く舞つて居る様は孤獨な私の胸に哀愁の涙を自然と見て居る間に湧かせるのを覺える。

かの山の詩人が住みしさいふ歌があるが、それはシェーラの詩人オーキン、ミラーが其晩年を送つて暮した山莊で、世界に其墓のないモーセの爲に詩人が築いた三角塔や、十字の常緑樹の山林があり、詩人の死骸を灰として天に向つて散灰した角塔等が今も残つて居り、尙ほミラー夫人が住んで居る小屋や、野口米次郎氏の心を研いた小屋も残つて居る。私の町の裏の山から東の方へ數哩の地点にある山續きで、そこはオークランド市の一部分となつて居る。金門灣を目の下に見下るす展望のいい處である。こゝした處も私を引きつけてやまない。

亦「うつら／＼小鳥は鳴けり」の歌の小鳥は私の最も愛する小鳥の一つなる蜂雀である。此鳥の歌は可成り多く持つて居るけれど、茲に集めた頃は尠いので、其まゝとした。嘴の長い美しい身体の小さな、矢の様に早く飛ぶ、そして花の蜜を吸ふて生き

て居るローマンチカルな小鳥である。メイプルは日本の楓より葉が大きい。特別に美しくもないが、其若芽、若葉の頃の大きな赤い芽や葉は、誠に尊い心持を起させる。チェリーは櫻である。花は日本の櫻の如く赤さがなくて、稍々見劣りがするけれど、其實の大きくて美味な事は特別に人を引きつける。まして赤く大きな實が、熟れて葉がくれに見え隠れする様は、私の心をそゝらすには置かない。楡はエルムであつて、冬は其葉を落して月の夜空に高く其技を擴げ、恰かも天に向つて祈禱でも捧げて居る様は尊い崇高な感を起させられるけれど、春になると羽根の様な花を小夜風に吹き散らす其様は云ひしれぬ甘い情緒をそゝるものだ。まして若葉から青葉に移り變つて行く頃は云ひ知れない。又私の好きなのはアイビー(蔦)の類である。アイビーには種々の種類が多いけれど、イングリッシュ、アイビーは葉が大きいので美しくい。家々の窓や垣根にからまつたり、會や學校等の建築に纏ひついたりしたの等は典華な昔を忍ばせる。何といふ種類だか小さな葉の冬雨の降る頃、氷の様な白い花を咲かせる種類が私の隣家の垣にあるので、私はよく電車を待ち乍ら、其花の一ツ二ツを摘むでは、持つて居た書物の間に入れたりしたものだ。アイビーの葉の平たい形は好い感のすべしとて私の手觸りを喜ばせる。パセリーは一種の野菜の名だけれど、只だ單に赤い肉

や、白い皿を飾る爲につまとして一二葉つけられる其色は、實に生々した緑で、見るから心持ちいい、疲れた宵などの眼には見つけて居ると自然に疲れを忘れる様な野菜だ。サンノゼといふ名稱は、桑港の南方五十哩の地にある都會の名前で、加州では都會の一つだ。ガーデン、シターとして有名であり、其美しい事は眞のパラダイスの如くであり、サンタ、クララ平原の豊かな果實の集散地である。私は時々そこに出かけて、美しい空の色と、庭の美しくしさを、此上なく愛して來るのが常だ。

以上の様に説明したら限りなく多くの説明で一杯になる程書きたいけれど、そうするに歌の心持ちから遠ざかつたり亦雑白に逸するのを恐れるから、加減でやめるけれど、此の説明に對してだけでも多くの歌を集めたいと思つたのを強ひて止めた。それは私の或る一時期の歌のみを集める事としたからである。

加州の天空、極みない野と海の上の青空、孤獨な一青年の胸に似た青空、あゝこの青い大ぞらこそ、私の可憐しい五年の異郷の友であり、尊い心の氣高きであつた。私はそう思ふと、此數少ない取るに足らぬ私の和歌を「大空」と題する事に依て、私の心持ちも幾分顯はれ、亦加州の天の美しくしさを忍ばれるので、それを大變に嬉しく思ふ。

## 満天の星

満天の星を數ふる秋の夜の

今日此頃は戀ふ人もなし。

読み書きも爲し得ぬ頃の淋しさよ

そのさびしさに起る吾戀。

大空に雲はゆらげり雲のごと  
吾なげかひよ飛びてされかし。

熟れ果てし黒き無花果いちじく哀愁の  
血潮は胸に黒となるべし。

男とは逢はず見ずして戀ふものか  
一度心つげし其のち。

大空よ昨日も今日も變らざる

大青空よ獨り淋しむ。

たわぶれに戀は語れどたわぶれに  
生くのひと日を過しかねつも。

戀なきは泣きもし侘びてあり得べし  
詩神ミユルメに逢はん願悲しも。

故知らぬ涙流れぬ廣き世の  
何處を見れど語る人なし。

煙草はや思ひなやめる吾胸を  
ふさぎけふれと喫み耽るかな。

哀愁の心此宵仰ぎ見る  
星の光に魅せられて泣く。

吾庭の楡にに秋風心せよ  
あまりに吹かば皆散りぬべし。

我庭の楡の散り葉の風に泣く  
悲しき秋の夜となりにけり。

旬日の田舎ホテルに住ふ我  
思ひやまなく戀しき君を。



寂寥はやる所なしサンノゼの

大空大野見れどはてなし。

大空は見れど果てなしサンノゼの  
此の寂しさをせんすべもなし。

枯草に坐りてあれば枯れはてし  
草の命も思はるゝなり。

水なくて枯し草々其草の  
悲しみに似し吾心かな。

落日は一しほ赤し沈みゆく  
其名残なる赤は悲しも。

いさゝかの金を送るに大いなる  
事母に書く我の悲しも。

流るゝ雲

只一人流るゝ雲を淋しみつ  
眺めて居たり風車まふ。

此頃は願ふおとなしとく起きて  
見るよろおびや朝霧の色。

フリスコは霧立ちおめて静か朝  
幾條登る猛けき煙かな。

朝空は眞青く廣し夜の風  
吹き止みかも秋となりぬる。

秋空は眞青く廣し日頃見し  
親しき空の色まさりかも。

伏し姫の貌に似たるタマルバイ  
海のかなたに紺青に見ゆ。

汽車の窓に一つ一つにとまりたる  
雨のしづくの寂し我世は。

大海のつきせぬ水も汽車の窓に  
とまる滴しづくも同じ水かな。

病弱の父が弱へ此日頃  
わが見る心悲しかりけり。

静やかに煙は登り煙突の  
上の大空朝かすみかも。

今は只思ひ煩らふ吾夢の  
現うらは暑あつき涙なりけり。

主義なければ生きてゆかれぬ如くいふ  
友の安價な主義を聞くかな。

吾主義を強ひて一語に言はしめば  
愚にならん主義と答へぬ。

小人の心は悲し何故に  
黙し得ぬぞと一人なげきぬ。

努力とは黙してはげむ心ぞよ  
暑き涙をのど深くのむ。

若ければ胸もどろき狂ふかな  
別れ間ぎわの堅き<sup>たにぎ</sup>手握り。

楡の葉は静か月夜に散るものか  
君が住む家にともしびもなし。

落日は赤し

落日は赤し眞赤し風車

やまずめぐれり黄金の中に。

一しきり赤く映えたる落日の

消えの悲しも黒く寂しく。

吾戀は胸に落ちるす夕されば  
空の色さへ悲しかりけり。

落日は赤し眞赤し目の前の  
ポプラ並木の中に悲しも。

落日の朱はまばゆしはるか見る  
かの野々の野の一色の金。

労働の甘き喜び一望の

吾野を包む薔薇色の夕霞もや

朝霞晴れゆくなべにフリスコの

家並見にまさり静なりけり

若草に重みしだけの朝露の

すがぐし晴は心地よきかな。

海の上に大どかに立つ紺青の

山タマルバイ見つゝ寂しも。

とく起きて初日仰ぐと麥嶺バクレイの

山に登りぬ一人寂しみ

たまきはる祖母がかしおみつれゆきし

お宮詣でを今も忘れず。

東雲しのぶの赤き血の色青春の  
心は燃ゆる初日の出かな。

仰ぎ伏しおろがむ心さすらひの  
命なげかむ術すべなかりけり。

真心の誠は悲し來し方の  
心かわりの我にあらすな。

見下ろせば霞たな引き吾町は  
うす赤絹をきて醒しかな。

初日さす静か我町住みなれし  
心安さも寂しかりけり。

アメリカの大學を出し我友は  
物知り顔のふるまひをする

何ごとも生くのがめと毛嫌ひの  
心おさへて事務をとるかな。

人のため牛馬となりて働かん  
労働の身を寂しみにけり

雨雲はなつかしきかなそよ風に  
此大空を泣きつも渡る。

雨雲の涙此宵仰ぎ見る  
吾顔にふる吾園に降る。

旅にぬる夜は悲しや幾度か  
君を思へばいつか眠れり。

思へども逢はん術なしまして尙  
告げんよしなき吾心かも



よろこびは幾日逢はなく侘ぶる夜の  
君が電話の聲なりしかな。

冬枯の寂しき心此朝げ

垣の緑のアイビーをつむ。

大空の曇れるなべに降る雨の  
ひとしほ侘びて我庭に降る。

風吹きて鷗とく舞ひ波高し

君と別れて朝乗りし船

新らしき道の行手を思ふ夜の  
淋しき心とどめあへぬも。

赤々と熟れし杏の淋しみか  
物をほりしてやまぬ心は。

夕されば疲れて黒く集ひよる  
フェーリー塔の人の群かな。

フェリーに集ふ人々生くのため  
働く人を蟻と思へり。

生くの身の心疲れも此宵の  
パンの疲れか事務所の歸り。

背に腹のたとへは悲し早稲田出の  
友はあだもて恩をかへせり。

下僕しもべとは悲しきものぞ目上なる  
人に使はれ牛馬うしうまとなる。

緑の色

なにげなく皿に置かれしバセリーの  
緑の色のなつかしき夜。

久にして尋ねし友の變りたる  
生くの願の寂しかりけり。

若し天にみ神お在さば何故に  
我世悲しくなし給ひしぞ。

祈れども神は來まさず呪ども  
神は呪はず我のみの世や。

神なりし我を夢見ぬ一夜なる  
夢は我世と變らざるべし。

秋晴の沖つ邊遠し見つ慕ふ  
かなたの里の胸にうかべり。

猛々と立つ黒煙も大空に  
上れば薄し見えわかずかも。

暮残る沖の灰色寂として  
造船場の太き烟突。

かの山の詩人が住みし山莊の  
あたり霧たち静か夜かな。

風車静しずにめぐりて銀の雲  
一條青の空にかゝれり。

一面にすゞき穂ひきに咲き久ひさにして  
來し公園の淋し秋はも。

生れ來て美しくしと見しかずくも  
今美しくしと思はざるかな。

うつらく小鳥は鳴けり吾窓に  
赤き夕日の燃え盛るる

み母なる遠き故里目に見えぬ  
人のなさけの思はるゝ宵。

思ひやれば非土の悲しみ過ぎし日の  
四年も今も變らざりけり。

悲しきは四年たてごもいえやらぬ  
故里思ふ心なりけり。

陽に赤く映えし若葉メーブルの  
すがくしゆも見ゆる朝かな。

メーブルの赤き若葉も心して  
見れば悲しも赤き若葉よ。

夕日夕日赤あけに輝き吾思ひ  
安らかならず桃の花咲く

未だ醒めぬ旅の朝空サンノゼの  
東雲しのめにあけ今し流れぬ。

吾戀は青葉かくれに見えかくる  
赤チエリき櫻實チエリに似て赤きかな。

楡の樹の若葉下道宵暗に  
行く若男女わかうせはたぬしげにして。

夕されば木の間かくれに浮み出て  
物思はする春の月かな。

春や來と黄金の若芽身につけて  
木梢は月を抱きあるなり

若芽ふく樹のよろこびや春なれど  
月夜は月を抱きもこそすれ。

生くの身の涙流すは馬鹿者ぞ  
あらへてしばし働かんかな

マクベスの芝居がはねてチャプスイを  
物知顔の男とくひぬ。

物知りの男を前にチャプスイを  
喰ひつゝ心悲しかりけり。

おもてには怒りを見せすなまいきな  
友を心中こころに蹴りとばしけり。

人毎に已わらしと思ひ居る  
世の中なれば淺間しきかな。

此頃の乾きし心哀愁の  
涙にいたくうるほひしかな

哀愁の涙しなくば吾心  
乾きていつか枯れはてぬべし

### 卷末の言葉

長い間此書物の出版を投つて置いた。其理由は中途で厭になつたからだ。餘りに尊ひ詩歌に對して自分の羞を知らな過ぎると思つたからである。これだけのものを作るならもつと何うにかなつたらうにと思ふ怨があつたからである。恥を語らなければ眞價はわからない。今考へると實に何とも云へぬ物足りなさが之等の詩歌の上に自分乍ら見出される。然しもう一年前に印刷したものを厭だからさて何うにもならない。捨てるのも惜しい。小嶋鳥水氏は何んな事があつても私の紀念の爲にそして加州同胞の紀念の爲に思ひ立つた事はやれさ云はれる。亦友人等も盛に出版して置く様に告げるので進まぬ乍ら友人間に配るとした。ニイチエは自己出版に際して四十部位より多く刷らなかつたといふ。エーッ等でも四百部より多く出して居らない。それを私の如き無名の詩人が二百部刷つて置いた事も稍々多すぎる感がある。私はこの書に續いて第二の詩集の出来る事を一つの樂しみとし最も崇高な仕事さしたいと今から念じて居る。

此詩歌集の挿畫として澤山の畫を書いてくれ亦序文をも書いてくれた友人畫家松原兆雄君に深謝の意を表すると共に題字を書いてくれた岡早志君にも謝さねばならない。此詩歌集の頃から見ると今の私にも自然多くの心的變化のあつた事を感じるけれど、先づこれだけで、此書の終りとする。

千九百廿一年一月十四日夜

著者



畢

